東京大学総合研究博物館小石川分館

建築博物教室 第 2 回

シマのアーキテクチャ ——瓦屋根の語る琉球諸島の歴史

日時：2014 年 6 月 8 日(日)　13:30- 15:00

講師：石井龍太（城西大学経営学部助教／歴史考古学、民族考古学）

建築博物教室レポート

建築博物教室の第 2 回は「シマのアーキテクチャー瓦屋根の語る琉球諸島の歴史」と題して、石井龍太先生による琉球諸島の瓦の歴史を中心とした講演であった。以下に当日の流れを摘記しながら講演の内容を振り返ってみたいと思う。

はじめに、石井先生が専門とされる考古学からみた建築についての話があった。考古学における主要なフィールドは遺跡であるが、遺跡やそこから出土する遺物から過去の建築を知ることは非常に難しく、特にアジア地域の場合は木質の材が多く使用されているため、一度地中に埋まってしまうと痕跡すら残さず消滅してしまうことが多いということであった。そうした中で、遺跡から確認できる過去の建築の痕跡としては、基壇や柱穴、礎石といった建物の「下」にほぼ限定され、建物本体の痕跡はほとんど残らないが、瓦は建物の「上」の要素を伝えてくれる貴重な遺物であるということが説明された。筆者は日本古代史を専門としているため、石井先生の話は素直に理解できたが、参加された多くの方々は、考古学では建物の「上」と「下」の一部しか復元することができないといった話に驚いている様子であった。普段の自身の研究生活でも考古学の成果から建物の「上」と「下」の情報を得て、建物の「中」の構造について考えることは筆者の中では一般的であったが、多くの人にとっては意外なことのようであった。

続いて、瓦の種類についての話があった。世界の瓦は大きく分けて古代ギリシャ、南アジア、そして東アジアの 3 つを起源地として広まったとされている。日本列島や琉球諸島では中国を起源とする本瓦葺きの一群が伝播し、特に日本列島では瓦は仏教と深いつながりをもっており、6 世紀に寺院建築の一要素として朝鮮半島から伝わり、その後地方への寺院建立の拡大にしたがって全国に瓦が分布することになった。こうした段階を経て現在の日本に伝えられた瓦であるが、その特徴を簡潔に言い表すと「頑健・壮麗・高貴」であると石井先生は言う。「頑健」とは瓦には一度使い始めると数百年に及ぶ長い寿命を持ち、また強風に耐える重量と不燃性を併せ持つことを意味する。「壮麗」とは瓦は粘土から作られることから、複雑な紋様や形状を自在に作り出すことが可能であり、高い装飾性を持つとされる。そして「高貴」とは「頑健」であり「壮麗」である瓦を生産するためには専門工人による大量生産や瓦の重量に耐えるための建築構造が必要となってくるため、瓦使用者の経済的負担が少なくないが、逆に言えばそれは瓦屋根所有者の経済的優位性を示し、しばしば特権階級に独占され、象徴的な意味合いを帯びることもあることを示す。このように瓦は優れた建築材であるばかりでなく、所有者の自己主張のために屋根というギャラリーに配された「展示物」とみることもできるとする。

このような瓦の特徴を踏まえたうえで、琉球諸島の瓦葺き建築の歴史についての話があった。琉球諸島最初の瓦は 14 世紀後半に登場する朝鮮半島由来の高麗系瓦と日本列島由来

の九州系瓦であった。これらの瓦は沖縄本島にある一部の大型グスクからのみ出土することから、王権と結びつく特殊な屋根材であったと考えられている。しかし、その後一時琉球諸島における瓦の使用は途絶えてしまい、16 世紀に再び新たな独自の瓦が登場することになる。「琉球近世瓦」と呼ばれるこれらの瓦は中国と日本列島の影響を受けながらも独自の展開を遂げる。当初この「琉球近世瓦」は専用の土と窯で焼かれ灰色であったが、17 世紀後半から 18 世紀前半頃に実施された窯業生産の改革を経て、陶器と同じ貝が混じる土を使い、壺などと同じ窯で焼かれた赤色の瓦へと変化した。またこの頃には沖縄本島以外にも石垣島や宮古島でも瓦が使用されるようになり、生産地域も拡大することとなった。ただし、琉球王国は瓦の生産と使用を厳しく制限しており、瓦葺きの建築は王城と一部の寺院、貴族の邸宅、王府機関の建物に限定された。古代の日本などにも見られたように、瓦と王権の結びつき、あるいは独占的な利用は琉球においても同様であったのである。琉球の人々はそうした瓦屋根の建築に羨望の眼差しを向け、近代に入り琉球王国が解体されるとともに、沖縄県には爆発的に瓦屋根の建築が普及することになった。現在の沖縄のイメージとして赤い瓦屋根の建築というものがしばしば語られるが、琉球諸島の瓦は典型的な沖縄らしさを象徴するものとして新たな価値を与えられていると言えるだろう。

ここまで講演があった後、質疑応答の時間に入り、建築博物教室は盛況のうちに終了した。最後になったが筆者の簡単な感想を付け加えておく。小石川分館にある建築模型を見る時や普段私たちが建築というものについて考える際には、多くの場合建築の「中」の部分に注目が集まりやすい。屋根の構造について興味を持つ人はいるかもしれないが、屋根にどのような部材が使われているということまで普段意識している人は少ないだろう。しかし、今回の建築博物教室によって瓦屋根を含めた屋根が持つ機能は建築を規定し、それは建築が持つ社会的規制力にも反映されているということを筆者は改めて再認識したが、多くの人にとってもそれは深く印象付けられたのではないだろうか。社会の階層性にまで影響を及ぼす瓦であるが、琉球諸島における瓦は 14 世紀後半に登場した高麗系瓦と九州系瓦が使用されなくなった後、16 世紀に再び「琉球近世瓦」として登場する。この空白期間が生じた背景と再登場した背景はいったい何であったのだろうか。王権との密接な関わりを持ち続けた琉球諸島の瓦であるが、15 世紀にはそのような関係が絶たれたのであろうか。また再登場した背景には中国大陸や日本列島の影響だけでなく、朝鮮半島やあるいは地理的に近い台湾などの影響はなかったのか、気になるところである。たとえば 16 世紀の琉球諸島や台湾を含む東シナ海の海域では大航海時代にともなう交易や交流が活発であったことから、琉球諸島における瓦の再登場もそれらの動きの中に関係するのではないかと思った。

以上、雑駁なレポートに終始してしまったが、瓦屋根を通して建築そのものを考えながら、その社会的影響についてまで考察を及ぼす石井先生の講演は多くの聴衆を魅了したであろう。一つの部材がその建物の表象を規定するだけでなく、社会構造にも密接に関わっているというところに、今回の「シマのアーキテクチャ」の真髄があるのではないか。建築のアーキテクチャは社会のアーキテクチャでもあるということを今回の講演で改めて感じることができた。次回もまた魅力的な建築博物教室が行われることを期待したい。

（垣中 健志／小石川分館学生ヴォランティア）